

海外視察報告：カンボジアの現状と課題

(津田塾大学学芸学部助教授・お茶の水女子大学子ども発達教育研究センター客員研究員 外山紀子)

カンボジアについて

- ・ラモス・タイ・ベトナムを隣国とし、平均気温が27度くらいの非常に暑い国。4月から10月まで雨季でそれ以外は乾季。10月の11日から15日まで5日間、雨季の終わりに視察に行った。
- ・カンボジアの教育制度は、ポルポト時代に全部がいったんこわされ、歴史としては10年・20年。
- ・15世紀にはアンコール時代で、王朝が極めて繁栄していた。シャムと言うのはベトナムでタイとベトナムの属国状態のような状態に置かれて数世紀。1863年にはフランスの植民地になった。そのため今でも、政府の高官の方とか、ポルポト時代を生き抜いた知識層の方とかは、多くの方がフランス語を話す。制度的にもフランスの影響が非常に強い。1953年、シアヌーク国王が主導し、ようやく独立を達成。しかし1970年に、ロン・ヌル国防省がアメリカの支援を受けてクーデターを起こし、民主カンプチアという国を作ったが、その後色々な内戦が続き1975年から1979年の4年間にポルポトが大虐殺を行なった。1979年からベトナム戦争の拡大ということもあり、ベトナムからの侵攻、続く内戦。ようやく1991年にパリ和平協定が結ばれて、1993年、ようやく民主的な選挙が行なわれた。

幼稚園の歴史

- ・ポルポト時代の前には、ほんのわずかな幼稚園しかなかったという記録が残っている。保育料も高く、一部の特権階級の子供だけが行くところだった。
- ・1975年から1979年、ポルポトの時代に全てがゼロになった。1979年以降徐々に復興していった。
- ・現在は、様々な幼稚園がある。政府が設置するもの、個人が設置する私立、工場や企業・州などが設置する幼稚園など。
- ・2000年発行の「Policy on Early Childhood Education」という冊子を入手した。それによると、2000年現在では約93万人の3歳から5歳の子どものうち約6万人の子供が就園。就園率でいうと6.32%。今現在は8%という数字が先ほどあがっていたが、まだまだ低い。

視察概要

- ・公立幼稚園6箇所、教育省の教員養成局を視察した。
- ・教員養成局は、幼稚園から、小学校・中学校・高校と、全ての教員の養成を司る所。その局長さんと話した。幼稚園教諭の養成所、CYKが支援している保育所、政府系の孤児

院の視察、日本語補習校などでの日本のお母さん方へのインタビュー、ゴミ捨て場で働く子どもたち、JICAのシニアボランティアの方たち、青年協力隊の方たちからのヒアリングも行なった。さらに、NGOの事務所として、CYK、JLMM、SVRなどたくさんのNGOの方々にご協力いただいた。今日は、公立幼稚園のみについてだけお話しする。

カンボジアの公立幼稚園

- ・予算は非常に低い。予算といっても、職員の給与のみで、それもとても低い。保育料は、多くの園で徴収してないが、園の裁量範囲で徴収しているところもあるという話を聞いた。
- ・施設はどこも劣悪。木造だが、触ってみると指がうずもれていく、というような所。シロアリにやられている。雨漏りは当然で、園庭に溝があったりすると、雨がたまってボウフラが湧いている。遊具は園によって相当異なるが、何も無い園も相当あった。

公立幼稚園の実際の様子（視察ビデオ放映）

- ・教室の下は土で、先生を中心としてぐるっと椅子が置かれて、子ども達が座っている。一応3歳から5歳までの子どもを対象としているが、どうみても1歳半とか2歳くらいの子ももいた。
- ・お話の時間での先生の読み聞かせの時間では、真ん中にゴザがしかれて、子どもたちを集めて先生たちがお話する。教育省が出しているパンフレットによると、一クラスの人数は22人程度まで、と書いてあるが、視察先では40人くらいの子もがひしめきあっていた。園によっては一クラス40人から50人あるいは60人の子どもを詰め込んでいる。
- ・子どもが誰もおらず、園長先生と先生方が6名ほどお茶を飲んでいる園もあった。
- ・幼稚園の中には小学校に付設している幼稚園がある（資料1-6：ポーチェントン幼稚園）。こういうタイプの幼稚園では、5歳児だけを対象にしている。そしてやはり園舎がシロアリにやられている。園舎の裏側には、小学校の生徒が利用しているということもあり、休み時間の中にどこからかアメを売る人や、アイスクャンディーを売る人が現れ、子ども達が自由に買って食べている。そういうゴミをそのままポイッと捨てていくので、非常にゴミがちらばっている。
- ・ポーチェントンの小学校の付設幼稚園の保育室では、日本の支援で、昔日本で使われていた机や椅子が向こうに送られた。椅子自体が15人分ほどあったが、実際にはここに40人の子ども達が入るといったことだった。
- ・公立幼稚園に関しては、全国统一カリキュラムというものがある。これは年長クラスの時間割。公立幼稚園では全国统一カリキュラムというものがきっちり決まっていて、朝6時半から夕方4時半まで（といっても、幼稚園の多くは11時半まで、午後やることはほとんどない）、20分刻みで非常にリジットなカリキュラムが決まっている。統一カリキ

ユラムでは、お話の時間に5歳児クラスはこれをお話をしなさい、4歳児クラスではこのお話をしなさい、ということが非常に固く決まっている。幼稚園の先生は、とにかくその決められているお話をする。お話を読むと言っても、先生が一方向的にずーっと喋っている。で、子どもはずーっと座っている、という状態。

- ・実技がない。例えば絵の時間は、代表の子がひとり前へ出てきて描き、他の子ども達はそれを見ている。したがって、50人の中で、もちろん貧しい国なので紙がないとかクレヨンがないということもあるが、子どもに実技をさせるということが殆ど取り入れられていない。体操の時間も一応あるが、皆が一生懸命体操をしているとか、手足を動かしているという场景はほとんど見られない。
- ・カンボジアの場合には、リテラシーが非常に低いということもあり、幼稚園でも読み書きが中心になっている。シニアボランティアの方が言うには、棒を持って黒板をパンパンパンって叩いて教えるような、そういうメソッドで幼稚園でも読み書きを教えている。
- ・何かの活動を始めるときには、必ずみんなで拍手をする。先生が、一人一人にきちっと爪が切れているかを点検する。衛生教育が重視されているため。
- ・先生と話してみたが、予算も施設も劣悪だが、先生方の意識としては決して低くはない。子どもと一緒にいるのが好きだ、保育するのが楽しい、だから私は保育者をやっているんだ、ということだった。公立幼稚園の先生は幼稚園教諭養成所を卒業しないと入れないので、一応そういう意味では全員有資格者。幼稚園教諭養成所が82年にできて、その当時は小学校の先生を全国から集めて、3ヶ月程度で急に養成したということだが、資格は持っている。
- ・しかし、なんととっても予算の低さによる限界があり、低い給与で、貰った給与だけで生活もできず、劣悪な施設で、雨漏りがしてもそれを補修する予算も回してもらえないという状態で、いくらモチベーションが高くてもそれを維持するのは非常に難しい。

教員養成過程

- ・国で一つの幼稚園教諭養成所がある。養成期間は1年間。しかし学ぶ期間は大体4・5ヶ月だったそうだ。そのうち実習期間が2ヶ月で、付属の幼稚園で実習を行う。
- ・幼稚園教諭養成所では、様々な科目が一応やられている。文化・道徳性・生物・数学・心理学など。しかし、幼稚園教育に実践的に使えるような知識を教えているわけではない。例えば美術の時間では、影を描くための技術、デッサンの技術を何時間もずっとやっていたそうだ。
- ・幼稚園教諭養成所に入るためには、高校卒業が入校資格なので、ドロップアウトが非常に多いカンボジアの中で、高校を卒業して養成所に入る、というのはエリート。
- ・養成所の校長であるソリダ先生が書面で回答してくださったものによると、色々な問題点がある。メソッドが新しくない、施設が十分でない、教員の能力がまちまちである、教育に必要な資料が非常に不足している、など。

- ・教育省の教員養成局長によると、まずはベーシックエデュケーションの小学校中学校の9年間の教育が大事であるということだった。その上の教育、あるいは、幼稚園教育は二の次。それは、予算が低いのだから仕方がないということだった。ただし、幼稚園教育にもこれから力をいれていこうということで、例えば幼稚園教諭の養成期間を2年間に拡大するとか、カリキュラムも改訂に向けて今現在準備しているとのことだった。また、幼稚園教育を主に管轄する就学前教育局も設置したそうだ。
- ・就学前準備というのは、カンボジアでは、とにかく「読み書きを習得すること」。そのカンボジア式のメソッドで子どもたちに文字を教えることが幼児教育になっている。そういうこともあり、幼児教育は直接に教えるってということではなくカルティベーションなんだというお話をしたのだが、それについてどう思うかとお聞きしたら、「それは理解する」と。しかし、「じゃあ、それに対してどんな活動があるんだ」という話にはならなかった。

公立以外の幼稚園

- ・インターナショナルスクールの付属の幼稚園がある。1ヶ月当たり700ドルから千ドルのお金を取り、JICAの子弟の方や外国人の方が主に通っている。また都市部では一部リッチな層というものができていて、ホテル王だとか政府高官などの子弟などはインターナショナルスクールに行っている。
- ・そういうインターナショナルスクールを目指した幼稚園というのが、ここ数年非常に増えている。カンボジアでは英語を話せるといい職業につけるということで、英語を教えて欲しいという需要が高くなっている。そういうところの先生は無資格。とはいっても、先生の多くが大卒である。
- ・そういう幼稚園は、施設もきれい。先生も子どもも制服を着ている。

今後の課題

- ・今後の課題というのは、どれもこれも。施設も劣悪だし、職員の待遇もまだまだ。教員養成プログラムも、先ほども言ったように影を描くのに数時間も費やしているような、そういうプログラムのもとで先生方を養成している。また、統一カリキュラムということで柔軟性がない。そういう中でカンボジアの幼児教育は展開している。
- ・CYKの方やJICAの方など色んな方にご協力をいただいて、ようやく視察にこぎつけたが、そこで見てきた子どもたちの姿や先生方の姿を思い出してみても、どういう支援をしていけばその子どもたちにとっていいのか、というのは非常に難しい問題だと感じている。どういう支援がいいのかは、皆さんと一緒に考えていきたい。